

副詞「もし」の通時的變化とその周辺

山口 堯 二

- 一 はじめに
- 二 「もし」の用法とその推移
- 三 「もしも」「もしや」「もしか」
- 四 「万一」「自然」「ひよつと」
- 五 結び

副詞「もし」は、本来、推量・疑問・仮定の三者と共起する用法をそなえ、事柄の不透明な実現性・現実性を表す副詞であった。近代語ではその用途が次第に仮定中心になり、ほぼ近世後期を境に、仮定の副詞となる。近代語では、助詞「も」「や」「か」が、「もし」と一体化した「もしも」「もしや」「もしか」などが現れて、推量・疑問にはそれらが優勢化し、「もし」の仮定専用化を補完した。仮定の用法は、本来順接の仮定に限られていたが、逆接の仮定にも徐々にその用途を広げ、現代語ではほとんど順逆を問わない仮定の副詞になってきている。「もし」の周辺には「万一」「自然」「ひよつと」などの類義語もある。それらも、その語義がより分析的具体的であるだけ、「もし」の表示性と両立しうることによって、「もし」における仮定―推論の副詞化を支えたと推測できる。

一 はじめに

副詞「もし」は、古来、推量表現、疑問表現、仮定表現と共起してきた。しかし、近代語ではその用途が次第に仮定中心になり、仮定の副詞になってくる。「もし」が共起する仮定は、本来順接のそれに偏っていたが、古代語においてすでに逆接のそれとも時に共起しており、逆接と共起する例も時が経つにつれて徐々に増加してきている。

そこで、「もし」の用法は、推量表現、疑問表現、順接仮定表現、逆接仮定表現のそれぞれ（以下、推量・疑問・順接仮定・逆接仮定と略称する）と共起する、四つの用法に大別することができる。

ところで、室町期口語にはじまる近代語には、助詞「も」「や」「か」が「もし」と一体化した「もしも」「もしや」「もしか」の語形も現れ、部分的に「もし」の用法を補完した。特に推量や疑問と共起する用法は、それらのおかげで肥大形に譲られるようになり、「もし」自体の用法はやがて仮定と共起するそれに偏ってくる。

「もし」の周辺には「万一」「自然」「ひよつと」などの類義語もあり、「もし」と共用されることもあって、「もし」の用法の推移を補完した点があがえる。

本稿は、あらましそのような「もし」とその肥大形「も

しも」「もしや」「もしか」における通時的な推移を主な柱とし、それに「万一」「自然」「ひよつと」などの類義語との交渉を加え、併せて検討しようとするものである。

上代には副詞「けだし／けだしくも」にも、「もし」との類義性が認められる。また、疑問や推量との共起に限れば、「おそろく／おそろらく」「さだめて」などの類義語も少なくない。また、仮定と共起する用法に限れば、上代に順接のそれと共起し、後世、逆接のそれとのみ共起するに至る「たとひ」のような類義語もある。しかし、ここではそれらの語については立ち入らないことにする。

二 「もし」の用法とその推移

まず、「もし」の用法について、推量、疑問、順接仮定、逆接仮定の順に、そのそれぞれと共起する用法を取り上げ、併せてそれぞれの通時的ありようにも触れよう。

推量と共起する用法には、例(1)～(5)のように推量の助動詞と共起するものがある。(1)は推量の助動詞の終止法（係り結びのそれを含む）と共起するもの、(2)は打消推量の助動詞「まい」と打消の助動詞「ない」との二重否定と共起しているもの、(3)は助動詞「む」を含む成分が係助詞「は」「をば」の「ば」を含む）で提示されているもの、(4)は同じく「む」を含む成分が係助詞「も」で提示されて

いるもの、(5)は「むに」の形で、「む」が接続助詞「に」による複文の前句になっているもの、である。

(1) 琴は、もし母方の外戚こそ、かの俊蔭の朝臣の琴はつかうまつらめ。(宇津保・俊蔭)

・たづねいでは、もしちかく侍ところにはそれら侍らん。
(宇津保・国譲中)

・もし横笛なるらんと、とる物もとりあへず、(伽・横笛草紙)

・もしこの人の売らせたまふこともあるべし、太夫殿。
(説経・まつら長者)

(2) もし籠城の有まいでも御座ない。(雑兵物語・下)

・若二親の手前を遠慮して居やしやるまい物でもない。

(浄・仮名手本忠臣蔵・六)
・何はいふても相手は武士。若仕損じまい物でもない。

(浄・神靈矢口渡・四)

(3) 「然あらず者、汝送り奉れ。若し海中を度らむ時には
〈若度海中時〉、惶畏ら令むるコト無くあれ。」(古事

記・上)

・若し如此有らむ人をばへ若如此有牟人婆乎、己が教へ
け訓へ直して、各々己が祖の門滅ばさず、……仕へ奉るべしと
(続紀・宣命・五九)

・「……もししほしも後れむほどは、譲りやはしたまは

ぬ」などそのたまはする。(源氏・橋姫)

・もし五色のかせき尋て奉らん者には、金銀・珠玉等の宝、ならびに一國を賜ふべしと(宇治拾遺・九二)

・若一人も留められんは、中々罪業たるべう候。(覚一本平家・三・赦文)

(4) もしこの事はりををも、おもひさだめざらんさきに、この世の事をもいのり、あらぬかたへも廻回したらん功德をも、みなとり返して、往生の業になさんと廻回すべき也。(法然消息・宛先未詳)

(5) もし心を得たらむに、さいふばかり物のあはれも知らぬ人にもあらず(源氏・蜻蛉)

・もしこひうけてものほらむに、さきにきりたらんかなしさをば、いかせむずる。(覚一本平家・十二・六)

代)

例(2)の二重否定との共起は近代語の例である。(3)(4)のように、「む」を含む成分が係助詞「は」「も」で提示されているものは、その点で後述の順接仮定・逆接仮定と共起する(9)(11)にそれぞれ相当する点もある。(5)も、接続助詞

「に」による複文の前句における「む」と共起する、その複文構造において、順接仮定との共起に近い。(3)(4)(5)の用法には、その意味で、後述の仮定と共起する用法との連関性がめだつと言えよう。

なお、次の例(6)のように、古代語を中心として、危惧などの情意を担いやすい係助詞の連語「もぞ」「もこそ」と共起する例もある。これも推量の助動詞に相当する形式と見てよい。

(6) さがの院、もし宮おとこもぞうらみ(「うみ」カ)給とおほして(宇津保・国譲下)

・対面なんいまひとたびあらまほしきを、もし恨み残りもこそすれ。(源氏・若菜下)

・兵衛佐殿流人でおはすれども、すゑたのもしき人なり、もし世に出てたづねらる、事もこそあれとて、(寛一本平家・十二・紺搔之沙汰)

ちなみに、語源に関することをいえば、推量の助動詞「む」は、「もぞ」「もこそ」の「も」もそれであるところの、係助詞「も」が活用するに至ったものと推測される。⁽³⁾ 当面の副詞の「もし」についても、その係助詞「も」と副詞語尾、ないし係助詞の「し」に遡る見方がある。⁽⁴⁾ 本稿の主たる検討課題である「もし」本来の用法と、係助詞「も」の不確定性に富む性格⁽⁵⁾、ならびに、副詞と助詞との組織的な対応関係などから推測して、これも十分支持できる見方である。

以上の(1)〜(6)は、いずれも近世までの用例である。推量と共起する「もし」の例は、明治時代以降は見出せず、そ

の時代上の分布は、次の疑問と共起する用法に似るが、どちらかといえば、推量と共起する用法の方がやや早く衰退したようである。

次に、疑問と共起する用法に現れる疑問は、特定方式⁽⁷⁾のそれであり、それを表す助詞に「や」と「か」がある。一時期「やらん」も現れるが、それらの違いは疑問表現自体の通時的変化の問題に過ぎないので、ここでは特にその区別はしない。次にその例の一斑を示す。

(7) 問ひて曰はく、「若し、この鉤取れる魚有らむ乎へ若有取此鉤魚乎」トいふ。(古事記・上)

・身にもしきずなどやあらん、とて見れど、(源氏・手習)

・もしやたすかり給ふと、寛の水をまかせたれば、(寛一本平家・六・入道死去)

・もし主ばしあたり有るやらんと、しづ心もなかりけり。(伽・さいき)

・懐の額がもし木の葉にでもなりはいたしませんかと、(滑・八笑人・五下)

・同楽の手紙に曰く、……小生はもし御計音之広告出候かと「日本」来るごとに該欄を真先に披見致居候(正岡子規・仰臥漫録・十月二十日)

次のように「……もしらず」などと共起する例も疑問に

相当するものと見てよからう。

(8)もし天罰もあたり、天女を殺したるもしらずとて、

(伽・猿源氏草紙)

「もし」に疑問と共起する用例が容易に拾えるのは、近世頃までである。明治時代以後は稀になる。疑問と共起する場合は、後述の「もしも」「もしや」「もしか」などが適用されるのが、普通になるからである。

順接仮定と共起する用法は、古代語から現代語まであまり変わりなく認められる。その条件を表す形式には時代的变化がめだつ。古代語の典型的な形式は「動詞未然形＋ば」「形容詞連用形＋は」「……ずは」などであるが、「已然形＋ば」による一般条件の表示と共起することもあり、それが近代語の「仮定形＋ば」に連続する。近代語では「未然形＋ば」から生じた「ならば√なら」「たらば√たら」のほか、「活用語連用形十ては」なども普通になる。動詞の命令法や、例(1)と形の共通する、疑問の助詞「か」との共起も、仮定の表示法の一つとして、「もし」と共起することがある。しかし、それらの差や広がりには接続法自体の側の問題であるから、ここではそれらをまとめて、その用例の一斑を示すにとどめる。「もしの」と連体的に用いられた例も併せて示す。

(9)君が行きもし久にあらばへ若久尔有婆(梅柳誰と共

か我がかづらかむ(万葉・十九・四三三八)

・モシ人コレヲツクレバ、コノ一生ヲオクルマデ、毒ノ
タメニヤブラレス。(三宝絵・下・九)

・若神明仏陀の加備にあらずは、争か反逆の凶乱をしづ
めん耳。(覚一本平家・七・平家山門連著)

・木曾はもしの事あらば、法王をとりまいらせて西国へ
落くだり、(覚一本平家・九・河原合戦)

・もしその顧みがなくは、たちまち氣に違ひ、禍に会は
うずれば(エソボ・四四九頁)

・もし吟味役のかたぐいに見いだされては、詮なし。
(浮・武道伝来記・一・四)

・もし若殿でも産で見やしやれ、こなた衆は国取の祖父
様・祖母さまなれば、(談・根南志具佐・三二)

・もし彼病まんか、彼も余も一家もにつちもさつちも行
かぬこととなるなり。(正岡子規・仰臥漫録・九月二
十一日)

・もし人間とすれば、男ですか女ですか。(夏目漱石・
吾輩は猫である・二)

このほか、「……する時は」のように、意味上仮定性の
ある言い方と共起することも多いが、さらには次のように

準体句を主語として提示する係助詞「は」と共起した例も
稀にある。そのような「は」による提示にも、古くは特に

「ならば」などに近い仮定性を認め得たのであろう。

(10) 我レ昔シ智者ノ説シヲ聞キ、シカバ、若畜生ノ身ノ毛
金ノ色ナルハ必是菩薩也ト云キ。(三宝絵・上・八)

逆接仮定と共に起する用例は、順接仮定に用いられた例に比べて、きわめて少ない。そのため、古語辞典の類にさへ具体的にはほとんど注意されずに来ている。よって、中世以前については、気づいた例をすべて示し、近世以後の例もやや多めにあげることにする。

(11) さばれ、たれときこえし人の子ぞ。もし心ならでまい
りこずとも、つとおもひとりてなんあるべき。(宇津
保・俊蔭)

・なほ誰となくて二条院に迎へてん。もし聞こえありて、
便なかるべきことなりとも、さるべきにこそは。(源
氏・夕顔)

・命もし限りありてとまるべうとも、深き山にさすらへ
なむとす。(源氏・総角)

・さては、もしおこたらせおはしましたりとも、いかで
か聖のしるしとは知るべき、といへば、(宇治拾遺・
一〇一)

・もしふしぎにこのよをしのびすぐすとも、心にまかせ
ぬ世のならひは、おもはぬほかのふしぎもあるぞとよ。
(覚一本平家・九・小宰相身投)

・もし申しへ原文「もし申し」を *moxi moxi* と誤るゝ損
ずるとも、私一人の不覚でこそござらうずれといへば、
(エソポ・四二六頁)

・もし人が起あうても女子者、口へ砂でも頬張らせ息は
ねを上げさすな。(浄・鐘の権三重帷子・上)

・もしハアちんじちうやうで、間にあわねへとつても、
御家老様でもあんでも、ひでんの入るもなアねへ。
(酒・甲駅新話)

・もし組頭の娘などが組下の者の所へ縁があつて嫁いで
も、何も用はさせぬかいの。(伎・鼠小紋東君新形・
二幕目)

・もし全然無能でなく共人間以上の能力は決してない者
であると断定出来るだらうと思ふ。(夏目漱石・吾輩
は猫である・五)

・もしそう云うにしても君達に随分いやな感じを与える
だらう。(武者小路実篤・幸福者・一)

・もし自分が美貌だつたとしても、それは謂はば邪淫の
美貌だつたと違ひありませんが、(太宰治・人間失格
第二の手記)

逆接仮定を導く副詞には、「よし」「よしんば」「たと
ひ」「たとへ」などがあつて、それらが長く用いられてき
た。ところが、「よし」や「たとひ」には、近世になると、

次のように順接に用いられた例もまじつてくる。これも「もし」の動きと連関する現象ではないだろうか。

(12) よしいとおしいがまことならば、根引にさんしたがよ

ふじごる。(仮・難波鉦・一)

・よし又夫と顛れたらば、松王めを真二つ。(浄・菅原

伝授手習鑑・四)

(13) たとひ此事洩れて、旦那の耳に入たらば、いかなる死

罪に申付け、苦しき目にも逢ふべき事、(仮・竹斎・

上)

このような「よし」や「たとひ」による順接仮定との共起を、例(11)の「もし」による逆接仮定との共起と重ねて見れば、「もし」が逆接仮定と共起する用法を取り込んでいく結果、「もし」と「よし」や「たとひ」とを同類と見る意識も一部に生じたのであり、それが例(12)(13)のような順接との共起を許し、ないしは、誤らせたと解釈できる。

古来、「もし」は推量・疑問・仮定の三者に広がる用法をそなえていた。その用法の広がりから、「もし」本来の基本的な働きを見定めようとすれば、推量表現は事柄の実現性や現実性が不透明な場合の蓋然的な判断を表すものであるし、疑問表現も基本的に疑念解消志向に基づく解答案として成立する点でそれに近く、内面の疑念に発するだけ、その判断はより可能的でもあろう。仮定条件——仮定表現

には、疑問仮定・現実仮定・非現実仮定・一般仮定という四つの類型⁽¹⁰⁾が区別できるが、他の推量表現・疑問表現との共通項となるのは、やはり不透明な実現性や現実性であるう。その意味で、「もし」は、本来、事柄の不透明な実現性・現実性を表す副詞であったと見ることができる。

しかし、近代語では次第に推量・疑問と共起する用法が衰退して、「もし」は仮定を導く副詞という性格を強める。また仮定については、次第に順逆を問わない副詞になってきた。

思うに、推量・疑問・仮定の三者と共起した本来の「もし」の働きには予想性が強く、事柄の不透明な実現性・現実性を表すその働きには、相対的に現実のありようとのかわりが濃密であった。しかし、仮定の条件形式が推論の形式として最も典型的なものであることを思えば、近代語の「もし」における仮定の副詞への推移は、むしろ現実のありようから離れて、自由に推論を導く表現性をこそ強めて来たものと言えよう。古代語から問々あった逆接仮定との共起にも次第に手を広げ、順逆を問わない仮定の副詞になってきたのも、そのような方向への推移と軌を一にする⁽¹¹⁾と見ることができるとすれば、本来、事柄の実現性・現実性を判断基準にしてきた「もし」における、仮定の副詞への移行は、「もし」がその現実とのかわりを次第に薄

めて、脱現実的に、むしろ一般論的な妥当性を判断基準とする度合いを強め、より自由に物事を仮定して、推論を展開しやすくする方向への変化と見ることが出来る。その意味で、「もし」の推移は、自由な推論を支援する副詞への道であったと見てよからう。

三 「もしも」「もしや」「もしか」

室町期口語にはじまる近代語では、「もし」に係助詞「も」「や」「か」の伴う「もしも」「もしや」「もしか」などの語形も現れて、すでに述べた「もし」の推移を助けた。

「もしも」は、古代語でも「もしもひま侍らば」(宇津保・菊の宴)などと、間々「もし」に下接することのあった、係助詞「も」が「もし」と一体化したものであり、「もし」の表す不透明な実現性・現実性を、より強く表せる語になった。室町期以降の「もしも」にも、次のように(14)推量、(15)疑問、(16)順接仮定、(17)逆接仮定のそれぞれと共起した例がある。「もしもや」の形も時に見られるので、それも併せてあげる。

(14) いかなる女御后にも、又は位高き公達などこそ、もし

も思ひつき候はんづれ。(伽・文正さうし)

・もしも流れを立つる遊び物にも心を引かれありなん。

(仮・恨の介・下)

・もしもきの子に多ひたらん人は、はやくかまどの前の土をほりて、水をくみ入、かき立て其水をのむべし。
(随筆・ひとりね・上)

(15) 都は人目つつましや、もしもそれかと夕まぐれ、月もろともに出でてゆく(閑吟集・一〇九)

・もしも別府方の者にてもありもやせんと思召、(舞の本・百合若大臣)

・もしも二階の格子から顔も見へるか、声するかと、
(浄・曾根崎心中)

・もしもやたすかる事もあるべきやと仰下されて、(伝記・折たく柴の記・上)

・若しも御心覚えは御座いませんか。(末広鉄腸・雪中梅・七)

(16) 呉起若毛留テ魏ニイウズト思フ心ガアラバ領納セウズ
ゾ(史記抄・孫子呉起列伝・一〇35才)

・もしもかやうにあるならば、立てた誓文の御罰をば、
なにとなるべき、悲しやな。(説経・かるかや)

・もしも狙ふ人あらば、拔身の下へ此の法師が駈け入つて討たれんと(浄・心中万年草・上)

・今でももしもの事あつたら、なんで奉公するぞ。(伎・傾城妻恋桜・上の中入)

・もしもこの天の川がほんたうに川だと考へるなら、そ

の一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。(宮沢賢治・銀河鉄道の夜・一)

もしも班内にかえって行つたならば、彼等はすぐさま古い兵隊たちから用事をいつけられるにちがいないかつた。(野間宏・真空地帯・二・二)

(17)もしも道にて追手のかゝり割れくゝになるとても、浮名は捨てじと心がけ、剃刀用意いたせしが、(浄・曾根崎心中)

次に、近代語の副詞「もしや」は、中世における係り結びの衰退に伴い、古代語でも「もし」の直下に来ること(例(7)の第三例)のあつた係助詞「や」が、「もし」と一体化したものである。

「もしや」には、連体助詞「の」を伴う「もしやの」の形で、次のように断定表現と共起することもある。ほかに、「便」「油断」「合戦」「時節」などにそれを冠した例がやはり同じ作品に断定表現と共起しており、「もし」の用法とは重ならないものになっている。

(18)もしやの幸を相待し処、彼盗人如し案かうがいを持来り、(甫庵太閤記・一)

「もし」の用法と重なるものとしては、次のように(19)疑問、(20)順接仮定のそれぞれと共起した例がある。

(19)もしや恋などをばなされてかく思ひ煩ひ給ふこともやあらむと(仮・一休ばなし・一)

もしや人の竹の子を盗みて伐りもやせんと思ひて、(嘶・鹿の巻筆・一)

行き来の駒の足音も、もしや忠兵衛が帰るか、(浄・傾城三度笠・上)

もしや真実にてあらふかもしれぬ。(随筆・ひとりね下)

もしや騙されたのではあるまいかと云ふ猜疑だけは醒めてゐる。(森鷗外・雁・拾弍)

(20)自然きやうだいが身の上に、もしや大事のある時は、身代わりにもお立ちある、地藏菩薩とお申しあるが、

(説経・さんせう太夫)

今日もしやく御差合ひもなく候はゞ、御越し候はんか、など申しつかはし、(仮・難波鉦・三)

もしや夫の病気がおもり、我ゆへなりといはれては、これまでなさけのおおくろへ、道立たず義理立たず。

(浄・狭夜衣鴛鴦剣翹・三)

若しや縄でもくびれ込んで間違ひ三度のある時は、此家主が掛り合ひだ。(伎・盲長者梅加賀鶯・六幕目)

このように一語化した副詞「もしや」が出現するのは、室町期以降と見てよい。推量と共起した例は見出せなかつ

た。「もしや」の「や」が、より蓋然性の強い推量との共起を妨げるのであろうか。

近代語には、「もし」の直下に助詞「か」を添える「もしか」の形も現れた。「もしか」の「か」は、「もしや」の「や」に対する文語意識から、それを口語的な「か」に換えたものとも、あるいは、「もし」の表す不透明な実現性・現実性を、近代語の副助詞「か」を添えることで独自により強く表したものと解せる。

次のように室町期の抄物に見えるのがその早い例であるが、近世にはその例が見つけられないので、明治以降の「もしか」とは区別するほうがよいのかもしれない。これは推量と共起した例である。

(21) 遅ク来ル故人カナ。サレドモ、若カ故人ノ来リモセン
ト思テ、コラヘテ天下ノ酒ヲ半甕ホド貯^ケタゾ。早々
来臨アルベシト云心也。(中華若木詩抄・八四)

明治以後の「もしか」の例には、次のように(22)疑問、(23)順接仮定のそれぞれと共起した例がある。

(22) 「もしか彼女^{あの女}は遠からず死ぬるのぢやアあるまいか」
といふ一念^{一念}が電のやうに僕の心中最も暗き底に閃いた
と思ふと(国木田独歩・牛肉と馬鈴薯)

・ジョバンニはすっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入つてあかとおもひながら、手

を入れて見ましたら、(宮沢賢治・銀河鉄道の夜・九)

(23) もしか私の男が、出刃庖丁か抜身でも持つて、蒼く成つて飛込んだら、私が何うすると、貴下^{あなた}思つてるの？

(泉鏡花・日本橋・四十七)

例(23)のように順接仮定と共起するものには、その条件句がサ変動詞「する」を述語とする「もしかしたら」「もしかして」などがあり、それらの形には次に示すようにその後句も疑問表現に偏る傾向が出てくる。

(24) 若しかしたら何かの理由で父が裏から邪魔をしてゐるのではないかと云ふやうな邪推も一寸起した。(志賀直哉・暗夜行路・第一・五)

・もしかしたら来てくれるかも知れないとのことだつた。

(川端康成・雪国)

・もしかして女がその題名に興味をもつかと思つたのである。(三島由紀夫・金閣寺)

このように共起の偏る現象は、その「もしかしたら」「もしかして」などが、意味上、形式化することによつて、そのまとまり自体が、疑問と共起する例(22)の「もしか」に相当する、肥大化した形式になっていることを示すものである。

なお、「もし」に他の助詞などが下接した形には、このほかに「もしくは」や「もしは」の形もある。それらは次

のように他項との被選択的な関係を表示する接続詞として用いられる点で異なるので、その用法には立ち入らない。

㉟たゞ念仏を三万、もしは五万、もしは六万、一心にまうさせおはしまし候はむぞ、決定往生のおこなひにては候。(法然消息・熊谷入道宛)

ただし、それらの形にも次のように疑問や推量と共起することもあつて、その間にも連続性がないわけではないので、その点だけ一応注意しておきたい。

㊦験ハ一モナケレドモ益遣ルハ若クハ万一モ遇神仙事モヤアラントテナリ(史記抄・孝武本紀・八35ウ)

・人まろ・赤人を平城天皇の時の人とせる文は、真名序に合はざれば、若くは人まろの上の正三位の字などと同じく、後人の加筆なるもしらず。(国歌八論・古学論)

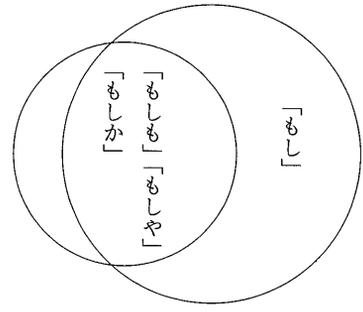
㊧時平の仰は天下の為御形代とはざる事なれ共、若は彼僧相人にて、君臣の相を能見るならば、王孫むすこにあらぬ臣下とするべし。(浄・菅原伝授手習鑑・序)

近代語には、以上のように「もしも」「もしや」「もしくは」などの肥大形が現れて、すでに述べた「もし」自体の仮定の副詞への推移を助けた。時期的には「もしも」がより早く現れるが、「もしも」は仮定との共起にも引き続きその強調形として用いられる。疑問・推量との共起に関す

る補完性と併せ、「もしも」は二つの役割を担ったとも言えよう。推量との共起は、近世以降、一足先に衰退するようであり、近世には、「もしや」が疑問との共起を中心に「もしも」を助け、明治以降は、「もしか」が「もしや」と交替して疑問との共起を中心に適用され、やがてそのさなる肥大形「もしかしたら」「もしかして」などに引き継がれるというのが、その推移の概要である。

本来の不透明な実現性・現実性を表す副詞から、近代語の仮定の副詞になっていく、「もし」の推移が、すでに述べたようにその現実とのかかわりを薄め、一般論的な妥当性を判断基準とする度合いを強めていく変化であったと見れば、「もしも」「もしや」「もしか」などの肥大形の、より強調的な表示性と、推量・疑問を中心とした「もし」への補完性も、言い換えれば、「もし」本来の対現実的な性格を、それらが肩代わりすることによって、相対的にその変化を方向づけ、促進したことになるだろう。実現性・現実性から一般論的妥当性へという判断基準の推移は、それらの副詞のめざす判断の対象が、事柄のより具体的な蓋然性から、より抽象的な可能性へと変化してきたことでもある。その関係は、図Ⅰのように図式化して示すことができる。

図 I



一般論的妥当性 — 可能性



(判断基準)



実現性・現実実 — 蓋然性

四 「万一」「自然」「ひよつと」

「もし」の周辺には、「万一」「自然」「ひよつと」などの類義語もある。「万一」は上代から例があり、中世には「自然」が現れ、続いて「ひよつと」も現れた。それらにも、「もし」の通時的変化を助けた点があるだろうと推測される。

まず、漢語「万一」は、数詞の複合語として、事柄の現れ方の極端に低い確率を表し、またその意味で「もし」などに近い陳述副詞⁽¹¹⁾としても用いられる。「万一」の漢字表記は、呉音で「まんいち」と訓まれることが多いが、漢音

で「ばんいつ」とも訓み、また「ばんいち」など、両音併用の訓みもある。連用的には助詞「に」「も」「にも」を伴うこともあり、助詞「の」を伴って連体的にも用いられた。漢字表記の訓みは特定しがたいことも多いが、当面、訓みの違いは無視してよいだろう。

「万一」は、事柄の現れ方の極端に低い確率を表すだけに、その用法は、「もし」の類のそれよりも広い。たとえば、それが連体助詞「の」を伴うものには、次の例(28)のようにたんなる断定表現と共起する用法もある。連体助詞「の」を伴うことは「もし」にもあったが、たんなる断定と共起する用法は「もし」には見当たらなかった。

(28) 張儀コソ先用ラレウズガ、吾ガ万一ノ幸デコソ先用ラレタゾ(史記抄・張儀列伝・一〇78ウ)

しかし、「万一」の用法には、「もし」のそれと重なるものが多く、「もし」と併用されることも少なくない。また、逆接仮定と共起する例には、副詞「たとひ」「たとへ」と併用された例もある(その「もし」「たとひ」「たとへ」には傍点を付す)。次の例(29)は推量(助動詞、またはそれ相当の連語)と、例(30)は疑問と、例(31)は順接仮定と、例(32)は逆接仮定と、それぞれ共起した例である。「万一」をもとにした強調形と思われる副詞「万々」の例も併せてあげる。

(29) 万一、脇に憎しむ者あつて、我々にめいわくさせん為

に、申たるにぞ有べし。(浮・武道伝来記・六・三三)

万一又、しそこなうめへもんでもねへが、(滑・八笑人・三下)

(30) 必しも信ジハセネドモ、万一モ真ノ神仙ニモ遇フ事モアリヤセウズラウトテ、断絶ハセラレヌゾ(史記抄・

孝武本紀・八45才)

(31) 如し慮はぬ表に、万一変有らば、何を以てか卒に応へ、何を以てか威を示さむ。(続日本紀・天平宝字三・三

二四)

万一かひなき命たすかりたらば、いかにもして汝等をもたすくべし。(古活字本保元・中)

万一、しそんじありてはかへらじ。(浮・武道伝来記・三・二)

もしこの事があつたため、万一郷里に伴れて帰られるやうなことがあつては、自分が済まぬといふので、

(田山花袋・蒲団・四)

万一にも私に古風な趣味があるならば、彼の脚にブリキぎれの指輪をはめてやつてもいい。(井伏鱒二・屋根の上のサワン)

(32) 万一爰へ尋ねてござつたとも、かならずく物いふな

(浄・大経師昔暦・中)

たとへ、帰られる様な事が万一あつても、お前の事は(人・春告鳥・五・二十九)

万々一お前さんが御本店の事や何かで、彼は沢山苦労を被成なされるような節ときになつても、少しは私が心ばかりでも

お前まはんの手足たそくにならなひでは、恩返しも出来ず、

(人・英対暖語・四・二一)

万一寒月君が迷亭杯の説法に動かされて、此千古の良縁が破れるとしても、此陰士が健在であるうちは大丈夫である。(夏目漱石・吾輩は猫である・五)

そのとき赤ん坊はまだ目が明いてゐないのだとか、た

とひ万一明いてゐたにしても記憶に残るやうなはつきりした観念が得られた筈はないのだとか、(三島由紀

夫・仮面の告白・一)

夫・仮面の告白・一)

「万一」における「もし」の用法との重なりは、言うま

でもなくその類義性によるが、「もし」「たとひ」との併用は、その類義性ととも、その併用を有効とするだけの

相対的な表示性の差が両語の間にあることを示すものでも

ある。併用される場合は、「もし」「たとひ」が先行し、

「万一」はその後にしか現れない。陳述副詞「もし」「たとひ」の表示性は、より直観的であるが、それに対して、

事柄の現れ方の極めて低い確率を表すという「万一」の表示性はより分析的であり、その差が両語の併用を許し、か

つ、その語順を決定していると見てよい。「万一」が逆接仮定と共に起する頻度は、「もし」のそれよりもむしろめだつので、「もし」におけるその増加には、類義語「万一」による先導の結果という面もありそうである。

なお、「万一」の漢字表記は、それに「もし」または「もしも」とルビを付して、「もし」の類の表記にも用いられることがある。それは両者の類義性と漢字表記のもつ視覚的效果を利用したものである。この種の表記は、次に例示するように近世末期から明治初期にかけての作品によく認められるように思う。

(33) ア、万一も二個が添れずは、否でも死んでお呉れな、

ト言つつ涙をはらくく。(人・春色梅美婦襦・二)

二(一)

・萩原様に万一の事が有りましたは(三遊亭円朝・牡丹

燈籠・二二)

・万一の事が有りでもしたら(尾崎紅葉・多情多恨・後

十一・二)

「万一」の周辺には、それと同じ数詞による連語的な言い回しも多い。「百千に一つ」「千方が一つ」「万が一」「万に一つ」などの言い方である。その用法の広がりも、「万一」と同様、「もし」よりは広いが、ここではその細かい用法の区別にまでは立ち入らないで、その一斑を示す。な

お、近現代語の「万が一」は、連体助詞「が」の衰退に伴い、結果的に一語の副詞と意識されるようになってきたはずである。

(34) 万の一にもへ万之一仁毛。此の文に違犯せしめば、上

は梵天帝釈、下界は伊勢、春日、賀茂、別して氏神正八幡大菩薩等の神罰を源範頼が身に蒙るべきなり。

(吾妻鏡・建久四・八・二)

・万が一、此たび命いきて侍らば、それまいるべしと

(古今著聞集・宿執・四八八)

・もし千方が一つ傷なき子の死にたらば、師匠にこそ悪心をば結ばまし。(撰集抄・六・九)

・モシ百千二一ツモ物ノ不思議ニタスカル事ヤト思ヒ候。

(雑談集・五)

・万に一つ云訳立ぬに極つて、いか成ルつみにあふとても、左衛門様の名は流すまい笑はれまいと、(浄・

新うすゆき物語・中)

・それは、もし、万ヶ一真個に仰有つて遣はされたに為

ました処で、私わたしは始めから其の気では聞きませなんだよ。(泉鏡花・日本橋・三十)

さて、不透明な実現性・現実性を表す「もし」の周辺に

は、事柄の現れ方の偶然さや意外さを、より情態的に表す副詞もあり、それらにも「もし」との類義性が認められる。

漢語の副詞「自然（しぜん）」や、擬態語の副詞「ひよつと」がそれである。

まず、漢語の「自然」は、本来、形容動詞であるが、中には副詞としての用法もめだつてくる。副詞としては基本的に情態副詞的であり、用法も「もし」のそれより広い。たとえば、次のようにたんなる断定表現と共に起する用法は、「もし」のそれとは重ならない。助詞「に」を伴う例も含めて示す。

(35) 此おもひをなす時、法衣自然に身にまひとつて肩にかかり、天より金の鉢くだる。(覺一本平家・六・慈心房)

しかし、副詞の「自然」にも、その共起のしかたにおいて、次のように「もし」のそれと重なることが多い。例(36)は推量と、例(37)は疑問と、例(38)は順接仮定と、例(39)は逆接仮定と、それぞれ共起したものである。

(36) な見まふそとはいふたれども、しぜん物かげから見る事もあらふ所で、座禪の姿がなくては、身共をたゞおくまひ程に、(虎明本狂言・花子)

・三日の暇を賜るものならば、自然後の世に、君の長夫婦の御身の上に、大事のあらんその折は、引き代り自らが、身代りになりとも立ち申さうに、(説経・をくら)

(37) 我等の何かと申も、しぜんたすけさせられうずるか

ぞんじて申てござる (虎明本狂言・武悪)

(38) 自然の事候はば、まっさきかけて命をたてまつらんとこそ、日來は存て候つれども、(覺一本平家・四・競)

・都へのほらばやと思ひしが、しぜん舟なくてはいかがあるべきとて、又うばに御器と箸とたべと申しうけ、

(伽・一寸法師)

・しぜん咎むる人あらば、腕の骨の続かん程、太刀の柄のあらん限り、切り乱すものならば、(仮・恨の介・下)

(39) しぜん加勢などにござるとも、某一人御馬のさきへまいれば、満々たる敵も、……めつきやくいたす、(虎明本狂言・栗田口)

・自然落ちてありけるとも、たんじやうなる心をお持ちあるな。(説経・さんせう太夫)

中世の副詞「自然」における、このような「もし」の用法との重なりは、やはりその両者の類義性によるものであり、事柄の偶然的な現れ方を表すその表示性が、より情態副詞的なものとして、「もし」のそれと両立する関係にあることの現れであろう。「もし」と併用された例は入手していないが、日葡辞書には、「Xijen. シゼン Moxi. <ひよつとして>」とあって、「もし」をその類義語として

いる。なお、前掲例(20)の第一例に上げた「もしや」には、

この「自然」が先行してそれと併用されているが、例が限られていたので、その先後関係に、どの程度の必然性があるかは、判定しにくい。

次に、副詞「ひよつと」は、事柄の現れ方の意外さを模写的に表す擬態語である。これも本来、情態副詞的であるだけに、用法は「もし」の類のそれよりも広い。たとえば、次のようにたんなる断定表現と共に起する用法は、「もし」類のそれとは重ならない。

(40) 楽人ノ云ハ鳥獸ノ音モ皆律ニ応ズルガ、只鳥ノ声ガ不
応律ゾ。低歎トスレバ、ヒヨツト高イゾ。(史記抄・
夏本紀・二41才)

・何とぞ致しました時には、ひよつとたんきが出ます。
(盤珪仏智弘濟禪師御示聞書・上)

・外国の街を歩いていてひよつと思いがけない親切を受
けるときがある。(北杜夫・どくとるマンボウ航海記・
私はなぜ船に乗ったか)

しかし、「ひよつと」の用法にも、次のように「もし」のそれと重なるものが多く、「もし」と併用されることも少なくない。例(41)は疑問と、例(42)は順接仮定とそれぞれ共起した例である。

(41) 此の冷たさで仕舞へばよいが、ひよつと憂い目は見せ
まいか。(浄・心中天の網島・下)

・お半女郎と二人の仲、ひよつと私が知つたかと、いひ
わけにさしやんす仲人、(浄・桂川連理柵・帯屋の段)
・金満と云もんだから、ひよつと欲心で出来よふかと。
(滑・八笑人・二下)

・ひよつと此節おたづね者の丹次郎をかくまつてあるも
しれねへ。(人・春色梅児誉美・一・九)

・よもやとおもへど、若ひよつと、難儀の懸る大變を、
仕出したるかと案じられ(人・春色梅児誉美・三・一
七)

・もしまたひよつと外にもあやしいことでもあるや、そ
れならばあのやうにいひもせずいはれもせぬにと(人・
春色辰巳園・三・四)

(42) 可問事モナク可答事モナキニ、ヒヨツト問へバ、其
ニツイテ不審ガデキテ不知所答ガ如ナゾ。(四河入海
五・三15ウ)

・今宵の事がひよつとお上ミへ聞へては、姫君さまも此
籬も大ていのことでない。(浄・新うすゆき物語・中)
・夫でも、ひよつとおやしきの御用が有たらどうしなん
す(洒・甲駅新話)

・ひよつと筋の違つた意趣で、も為た訳なら、相手の十
兵衛様に先此婆が一生懸命で謝罪り、(幸田露伴・五
重塔・二十八)

順接仮定条件と共起する「ひよつと」のうち、その条件句内の述語動詞にサ変動詞を用いて形式化した、「ひよつとして」「ひよつとかして」、「ひよつとしたら」「ひよつとかしたら」などには、先述の例(4)の「もしかしたら」などと同様、その後句も疑問や順接仮定の表現に偏る傾向が出ている。その点から、これらはその条件句自体を、疑問や順接仮定と共起している例(4)、(42)の「ひよつと」の、さらに肥大化した形式と見ることもできる。例(43)は疑問と、例(44)は順接仮定と、それぞれ共起した例である。

(43) 此頃の挙動と云ひ容子と云ひ、ヒヨツとしたら本田に……何しては居ないかしらん……(二葉亭四迷・浮雲・十一)

・ひよつとすると、僕は戦地へ行つちまうかも知れないよ。(島崎藤村・春・百四)

・ひよつとかすると最早名倉さんの方へ帰つて居るかとも思ふが(島崎藤村・家・犠牲統篇・二)

・ずつと昔、海軍にゐたことのある守屋恭吾つて方が……ひよつとして、乗つていらつしやらなかつたでせうか。(大佛次郎・帰郷・夜の鳥)

(44) 孫や彦のこちとら組は、先祖の戒名をおぼえずに暮して、ひよつとして拜む時には南無御先祖さまとか、十

五日の仏さまとか云て済すまして置くはス。(滑・浮世床・二下)

・ひよつとかして、袖でも触つて鳴ると悪いね。(泉鏡花・夜叉ヶ池)

「ひよつと」における副詞「もし」との併用も、その両者の類義性とともに、その併用を有効とする相対的な表示性の差を示すものである。「もし」が先行するその語順は、陳述副詞「もし」のより直観的な表示性に対して、事柄の現れ方の意外さを擬態語的に表す「ひよつと」の表示性が、情態副詞的により具体的なありようとして、「もし」の表示性と両立する関係にあることを示す。

「万一」の漢字表記には、「もし」や「もしも」のルビを付すものがあつた。「ひよつと」にも、「万一」の漢字表記を視覚的に利用しながら、次のようにルビによって、それを「ひよつと」と読ませているものがある。

(45) 万ひよつと一今夜母人さんが来ておくれでないと、私やア兄さん(人・英対暖語・二・八)

・逢ひに参つて若し万ひよつと一飯島の家来にでも見付けられてはと思へば行く事もならず、(三遊亭円朝・牡丹燈籠・四)

・もし万ひよつと一お母さんが聞きでもすると私が叱られる、(樋口一葉・たけくらべ・六)

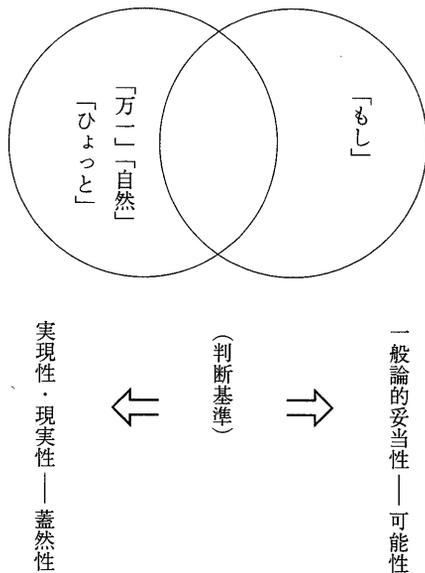
「ひよつと」の表記におけるこのような漢字表記「万」の利用も、その両者の類義語意識を示すものであり、間接的には「もし」との類義語意識もうかがえることにな

る。
副詞としての「万」「自然」「ひよつと」の用法には、いずれも「もし」のそれと重なる点と、重ならない点とがあった。その重なる点における「もし」との類義性は、それぞれ事柄の現れ方の確率の低さ、偶然さ、意外さを表す、それらの表示性が、「もし」本来の実現性・現実性の不透明さと両立する、そのより分析的、ないしは、具体的なありように当たるといふ、両者の関係によるものであった。

本来の不透明な実現性・現実性を表す副詞から、近現代語の仮定の副詞になっていく、「もし」の推移が、すでに述べたように対現実的なありようを離れて、脱現実的に典型的な推論の副詞になっていく変化であったと見れば、「万」「自然」「ひよつと」などの類義語が、より分析的具体的な語義によりつつ示す、「もし」と共通する振る舞いは、それらの副詞が、「もし」に本来担われていた対現実的なありようを中心に、替わって分担してきたさまであったと見ることも可能である。そのように見れば、それらの副詞の振る舞いもまた、副詞「もし」の、脱現実的に典型的な推論の副詞になっていく変化を、より底辺において

支えたと見ることが出来る。その関係は、図Ⅱのように図式化して示すことができる。

図Ⅱ



五 結び

副詞「もし」は、古来、推量・疑問・仮定の三者と共起する用法をそなえ、事柄の不透明な実現性・現実性を表す語であった。しかし、近代語では、「もしも」「もしや」「もしか」などの肥大形が現れ、推量や疑問と共起する用

法には、それらが優勢化して、「もし」自体は次第に仮定の副詞に移行する。仮定と共起する場合も、本来は順接の仮定に限られていたが、逆接の仮定との共起にも徐々に手を広げ、現代語ではほとんど順逆を問わない仮定の副詞になつてきている。古来の「もし」は、現実のありようとの関係が濃密であり、実現性・現実性——蓋然性を判断基準とする傾向が強かったが、「もし」における仮定の副詞への移行は、むしろ現実のありようから離れて、一般論的妥当性——可能性を判断基準とする度合いを高め、より自由な推論の展開に役立つ副詞への道であつたと言えるだろう。

「もしも」「もしや」「もしか」などの肥大形の形成とその振る舞いは、そのような「もし」の推移を、体系内部の手直しによって方向づけ、補完してきたものと言えよう。

「もし」の周辺には、より分析的具体的な表示性をそなえた「万一」「自然」「ひよつと」などの類義語もあり、それらも主として「もし」本来の対現実的なありようを肩代わりし、「もし」における仮定——推論の副詞化を、より底辺において支えたと言える。陳述副詞「もし」を中心に見た、このような仮定の副詞化と、それを補完し、支える類義語の形成と振る舞いには、副詞の部分体系のありようやその通時的变化の事例として、なかなか興味深いものがある。

注

- (1) 上代語の「もし」や「けだし」については、馬場治「続紀宣命における仮定条件構文の一考察」(『金沢経済大学論集』第二五巻第三号)、是沢範三「上代における「若」字使用の様相——疑問推量の場合——」(『古事記年報』四二)、同「上代における「蓋」字使用の様相——『日本書紀』を中心に——」(『国語文字史の研究』五) などがある(以上、是沢氏のご教示による)。
- (2) 日本思想大系本『古事記』の訓読文による。日本古典文学大系本や新潮日本古典集成本は、それぞれ「もし海中を渡る時」「もし海中を渡る時に」と訓んでいる。
- (3) 森重敏『日本文法通論』(昭和三四年、風間書房) 第三章第二節。
- (4) 川端善明『活用の研究Ⅱ』(昭和五四年、大修館書店) 第五章。
- (5) 大野晋『係り結びの研究』(平成五年、岩波書店) 第二章など。
- (6) (3) に同じ。
- (7) 疑問表現に関する考え方と用語は、山口堯二『日本語疑問表現通史』(平成二年、明治書院) によるが、一々には断らない。なお、「もし」の直下に疑問詞の来ことも稀にあるが、「もし。いかなるぞ。さる人こそ、さやうには悩むなれ」(源氏・宿木) のように、表現の省略と見て、諸注釈書も、疑問詞との共起とは認めていない。その扱いでよいと思う。
- (8) その点については、山口堯二『日本語接続法史論』(平成八年、和泉書院) などを参照されたい。
- (9) 現代語を対象とする、森田良幸『基礎日本語1』の「もし」

の項にも、逆接仮定については、次のように説明する程度である。

逆接条件「もし出題されたとしても、予習してあるから大丈夫」のような言い方は本来しない。こういう場合は、「たとえ」「かりに」「万一」などを使うのが妥当である。

(10) 山口堯二『古代接統法の研究』（昭和五五年、明治書院）第七章。

(11) 山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』（昭和一五年、宝文館）には、「万一」の語も、「陳述の副詞としてのもの」の中にあげている。ちなみに、「もし」も陳述副詞と見られているが、それは仮定条件との共起を中心としてであったと見てよい。なお、本稿における副詞の分類上の名称は、山田孝雄の『日本文法学概論』（昭和一一年、宝文館）による。